

## 体験型授業の課題と展望（３） －「地域社会と子ども」の実践報告－

### The Problem and the Vision of Experience-based Classes (3) － A Practical Report of “Community and Children”－

向 出 圭 吾<sup>\*1</sup>、山 森 泉<sup>\*2</sup>

#### 要旨

体験型授業「地域社会と子ども」は、2011年度に開始したカリキュラムから実施されている本学独自の入門科目であり、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士資格の取得を目指す学生にとって満足度が高い授業である。本稿では、2013年度から2016年度入学までの幼児児童教育学科<sup>1</sup>の学生のアンケート結果を分析し、経年の比較考察を行った。特に、2014年度から新たに加えた授業到達目標の自己評価の分析から、「Enjoy! ミッション」での4年生との協働や3回の参観とディスカッションの繰り返しが生徒の記録の記述力やコミュニケーション力を引き出していることが示唆された。

**キーワード：**体験型授業(experience-based class)／アンケート調査(questionnaire)／自己評価(self-assessment)／ディスカッション(discussion)

#### 1. はじめに

2017年度より北陸学院大学人間総合学部において、大学創設時からの学科名「幼児児童教育学科」を「子ども教育学科」と改称し、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士の免許、資格に加え、中学校教諭（英語）の免許を取得できるようになった。これは、新学習指導要領における小学校の英語教科化に対応できる小学校教員を養成する目的による学科改編である。このように時代とともに教育のあり方も変化していくのは当然であるが、一方で、教育には常に普遍的な内容も包含されているのは周知のことである。

学科名が変更された現行カリキュラムにおいても、0歳から15歳までの子どもにかかわる教育・保育のスペシャリストとしての学びを重ねていくために、必修の学科入門科目「地域社会と子ども」

を開講している。学生は1年次前期に、ゼミ単位で近隣の保育所・幼稚園・認定こども園・小学校を参観して、現場の概要と乳児から幼児・児童へ成長していく子どもの姿を具体的に知ることができる。この授業を通し、学生の資格取得に対する意識を明確にし、専門科目への学びの姿勢を養うことにつながると考えて設定された科目である。2016年度にカリキュラムの改編<sup>2</sup>が行われ、コースの見直しやコース名の変更があったが、本科目の名称及び入門必修科目という位置付けは変わっていない。但し、2017年度の「子ども教育学科」への改称に伴う新カリキュラム<sup>3</sup>では、中学校の参観が加わり、新たな到達目標が設定されたため、一つの区切りとして本稿では、2013年度から2016年度までの4年間の履修学生に最終授業で実施したアンケート結果とそこから得られた考察を述べることにする。

なお、2016年度までの本科目のシラバスの基本的枠組み<sup>4</sup>は変えていないが、シラバス作成に際しては毎年見直しを行っている。また、授業担当者は複数で構成されており、全員基礎ゼミを担当

<sup>\*1</sup> MUKAIDE, Keigo

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科  
保育内容・環境、幼稚園教育実習指導

<sup>\*2</sup> YAMAMORI, Izumi

長町幼稚園

する学科専任教員である。毎年ゼミ生の数に合わせて5～6人の教員<sup>5</sup>が受け持ち、教員の専門分野と関連付けながら授業を展開している。

## 2. アンケートの実施と結果

本学では、毎学期、授業最終週（またはその1週前）に学生による授業評価アンケートを実施している。本来全科目を対象に行うことが望ましいが、回答する学生の負担等の諸事情を考慮し、様々な検討を経て、現在では教員一人1科目の実施を原則としている。つまり、複数の授業担当者からなる「地域社会と子ども」は、授業評価アンケートの対象外の科目である。しかし、本学に入学した学生の資格取得に対する意識が本当に深まっているのか、改善すべき点はどのような点かをきちんと把握していかなければ、この科目を設定した意義が問われることになる。そこで、2011年度より授業最終回に、独自のアンケートを実施してきた。2012年度は質問内容を見直したが、それ以降は基本的な質問内容は変更していない<sup>6</sup>。2014年度からは、授業の到達目標に関する学生の自己評価を追加している点が大きな変更点である。

### 1) 学生の現状

入学時点での調査によるコース希望動向を表1に示す。2013年度は4月には免許資格を希望しない学生が数名いたが、その後は全員が免許資格を希望している。2016年度のカリキュラム改編で小学校教諭コースが新たにスタートして、小学校教諭コース・児童教育コースを合わせると34.3%となり、近年小学校教諭の免許取得を目指す学生が30%を超えて定着してきているのがわかる。

但し、この調査の後、「地域社会と子ども」での体験型授業を受けて、コースを変更する学生もいるため、前期終了時に改めてコース希望調査を

行っている。

### 2) 「授業の到達目標」の到達度

学生の学びが実際どうであったのかを知る指標の一つに、到達度を測ることが挙げられる。本学のシラバスには、「授業の概要」の次の欄に「到達目標」を記している。「地域社会と子ども」では、以下の①～⑦の到達目標を掲げている。

項目①：参観事前レポートを通して参観先の概要を把握し、ねらいを持って参観に臨むことができる。

項目②：参観・ふれあいを通して、年齢別・段階別の子どもの大まかな特徴をつかむことができる。

項目③：教師・保育者などの姿を通して、子どもにかかわる職業人についてのイメージを具体的に持つことができる。

項目④：参観した内容を客観的に記録し、そこから考察したことを区別して記録することができる。

項目⑤：参観先での気づき（子どもの成長や子育て支援の現状）を文章にまとめ、グループで発表することができる。

項目⑥：レポート作成やディスカッションを通して、地域の小学校・幼稚園・保育所が抱えている課題を発見し、対応方法について考えることができる。

項目⑦：グループディスカッションを通して、コミュニケーション能力を養い、他者の気づきから自己の学びを深めることができる。

そして2014年度より、この到達目標をどの程度達成できたのかについて、

5点：とても思う。

4点：思う。

3点：どちらとも言えない。

2点：そう思わない。

1点：全くそう思わない。

の5択形式での記入を求めた。これは、大学として実施している学生による授業評価アンケートの回答の選択肢と同じ表記である。以下に、年度別の項目ごとの平均値を表2に記す。

表1 コース希望調査（入学時） (%)

コース名	児童教育	幼児保育	人間理解	合計 (%)
2013年度	26.5	70.6	2.9	100
2014年度	38.4	61.6	0.0	100
2015年度	32.3	67.7	0.0	100
コース名	小学校	児童教育	保育教諭	合計 (%)
2016年度	7.5	26.8	65.7	100

表２ 年度別到達目標値の達成度（点）

	2014年度	2015年度	2016年度
項目①	4.1	4.1	4.2
項目②	4.1	4.0	4.1
項目③	4.2	4.2	4.2
項目④	3.8	3.7	4.1
項目⑤	4.0	3.8	4.0
項目⑥	3.5	3.5	3.5
項目⑦	4.2	4.3	4.3

2014年度から2016年度の学生の個人別達成度の平均値は、3.5点から4.3点までの幅になった。全体的にはほぼ同じ割合で推移しているが、「項目④：参観した内容を客観的に記録し、そこから考察したことを区別して記録することができる」については2014年度、2015年度に比べて2016年度の達成度が上がっているのがわかる。その要因は一概には言えないが、5月に行われる「Enjoy! ミッション<sup>7</sup>」でのあり方の影響によると考えられる。

他の参観活動には組み込まれていないが、「Enjoy! ミッション」では準備段階から異学年での交流が組み込まれている。具体的には、これまで1年生と活動を共にしてきたのは3年生であったが、2014年度より4年生に交代した。さらに、2016年度には、「遊びのプラン」の書き方から実施後までの記録の添削を、教員ではなく活動を共にする4年生が担当することになった。1年生はその添削された記録をもとにして色違いで修正加筆した記録を4年生に提出し、再び添削してもらう。これにより記録の視点や文章表現の仕方（客観的事実の記述、及び、そこから得られた考察）を比較的早い時点で学ぶことができたのではないと思われる。このように4年生にしてみれば、すべての実習を終えて就職に向けて自分が指導する立場になった時のことを考えた実践にもなっている。1年生にとっては、「Enjoy! ミッション」で行事を通して子どもとかかわる4年生の姿を見ることに加え、記録を含めた実践の指導を受けることにより、将来の教師や保育者としてのイメージを具体的に思い描くことができるという点で、4年生との協働は大きな意味をもつと考えられる。

その一方で、最も到達度が低い「項目⑥：レポー

ト作成やディスカッションを通して、地域の小学校・幼稚園・保育所が抱えている課題を発見し、対応方法について考えることができる」については、小学校・幼稚園・保育所それぞれ一回の参観では今日的課題を発見し、対応策を考えるまでのディスカッションは、1年生にとってまだ難しい目標であることが数値で示された。ただ、本科目が学科としての学びの方向性（＝卒業後の進路）を示す入門科目であることを考慮すると、1年生段階でこの到達目標を設定し意識することは決して無駄なことではないと考えられる。それは、入門時に「地域の保育・教育施設が抱える課題とは何か」を意識しておくことで、在学中に行う実習やボランティア活動の体験を通して、課題に少しずつ目が開かれていくことを期待しているからである。この期待が妥当であるか否かについては、卒業時または卒業後に再度本学科での学びを振り返って、実際の到達度を確認するといったアセスメント<sup>8</sup>を実施することで、検証が可能になるであろう。

### 3）授業の内容についてのアンケート結果と考察【質問１】

質問項目１では、学外体験の印象を聞いた。回答は選択肢ア～カを選ぶもので、回答者の割合（％）は表３～表６に示したとおりである。回答項目は、

- ア：とても印象に残っている。
- イ：どちらかと言えば印象に残っている。
- ウ：普通・予想通りだった。
- エ：あまり印象に残っていない。
- オ：全く印象に残っていない。
- カ：欠席して参加していない。

である。なお、各表中の「－」は回答者なしを示している。

表３ ①小学校（％）

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
2013	48.5	38.6	9.9	2.0	－	1.0
2014	41.7	33.7	13.1	3.6	－	1.2
2015	35.9	39.1	22.8	2.2	－	－
2016	56.9	33.8	7.8	1.5	－	－



表4 ②幼稚園 (%)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
2013	67.3	30.7	2.0	—	—	—
2014	55.4	29.8	9.5	4.8	—	—
2015	58.7	31.5	7.6	2.2	—	—
2016	67.7	29.3	1.5	1.5	—	—

表5 ③保育所 (%)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
2013	74.3	20.8	3.0	1.0	1.0	—
2014	72.6	18.8	3.0	1.2	—	—
2015	66.3	25.0	6.5	1.1	—	1.1
2016	72.3	20.0	6.2	—	—	1.5

表6 ④Enjoy! ミッション (%)

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ
2013	40.6	37.6	11.9	6.9	—	2.0
2014	57.1	21.8	11.9	4.8	—	—
2015	41.3	33.7	14.1	9.8	—	1.1
2016	26.2	43.1	18.5	12.2	—	—

①の小学校参観では、運動会当日や予行練習の小学校を避けて、なるべく通常授業を行っていること、また校内やクラスを比較的自由に参観できる小学校を中心に依頼している。参観前に学生は希望の学年を選び、まずその学年の授業風景を参観する。参観したい授業科目は指定できないが、学生は各学年の学級運営を、授業を通して観察、記録していく。授業の進め方、板書の仕方、教師と児童とのかかわりなど見るべきことは多い。また2時間目と3時間目の間の長休みは、学生が小学生とかかわることができる貴重な時間である。参観後の振り返りのディスカッションでは、各学年の違い（授業の進め方、児童の発達状況など）が話題になり、その情報を交換して、参観小学校の自分なりの意見をまとめていく。その後の合同ディスカッションでは、各自が参観した小学校の特徴を挙げて意見を交換し合うことで、自分なりの小学校のイメージを広げていく。「地域社会と子ども」ではこの一連の過程を大切にして、自己の学び（気づきと考察）を深めていく。

②の幼稚園参観は以前より、キリスト教主義の幼稚園での参観を行っている。2016年度より「幼

稚園教育実習Ⅰ」においてキリスト教以外の幼稚園にも実習に行くカリキュラム<sup>9</sup>がスタートしたことで、キリスト教主義の幼稚園に全員が触れる機会がこの「地域社会と子ども」の参観のみになったのは残念である。

③の保育所参観では、小学校・幼稚園参観に比べると、「ア：とても印象に残っている」の回答比率が高い。3回目の参観になる保育所の印象が高いのは、単に参観日時がアンケート実施に近いから記憶が鮮明であるという理由だけではないだろう。その要因の一つがキリスト教主義の保育園を含め、それぞれ制度的にも保育面でも特徴のある園（認定こども園、夜間保育園併設、異年齢保育実施など）を中心に依頼していることがあると言えよう。それらの特徴をどのように捉え記録し、ディスカッションにおいて自分の言葉で発表することができるか、3回目の参観になる保育所の印象が高いのは、それだけ見る視点が定まり観察の視野が広がってきて、より主体的に対象を把握している成果であると言えるかもしれない。

2016年度の特徴として表3の小学校参観の「ア：とても印象に残っている」が50%を超えたことが挙げられる。小学校教諭コースの新設の影響もあるが、実際に小学校教諭を目指す学生の意識や学習意欲が高い学年であるとも言える。それは児童教育コースも含めて2017年度前期のGPAがほとんど2.5以上<sup>10</sup>であることからわかる。

また逆に、表6の「Enjoy! ミッション」の「ア：とても印象に残っている」が極端に低いことも特徴である。これは以前のように1年生が3、4年生の補助をしながら「Enjoy! ミッション」の遊びを当日参加した子どもたち（主として幼児）とともに楽しむだけの活動から、1年生が4年生の指導のもとに遊びを創るスタンスに変わったことが影響していると思われる。特にこの年は小学校が会場であり、前日まで現場を見ることができなかったり、当日の朝に活動場所が変更になったことも1年生が戸惑った要因かもしれない。しかし前にも述べたように、その後の4年生による「Enjoy! ミッション」の記録の添削や修正加筆は、その後の参観のレポートを書く上で十分参考になっているのは事実<sup>11</sup>である。

【質問2】

質問項目2は、事前レポートによる参観先への思いを尋ねた。

回答は選択肢①～④を選ぶもので、複数回答可である。回答者の割合（％）は表7～表9に示したとおりである。回答項目は、

- ①：親しみが湧いた。
- ②：参観したい気持ちが強まった。
- ③：特に変化はなかった。
- ④：あまり関心が持てなかった。

である。

表7 ①小学校 (％)

	①	②	③	④
2013	34.7	44.6	26.7	—
2014	11.9	43.6	35.7	2.4
2015	20.7	52.2	25.0	2.1
2016	15.4	61.5	21.5	1.6

表8 ②幼稚園 (％)

	①	②	③	④
2013	35.6	55.4	13.9	—
2014	16.7	69.0	14.3	—
2015	18.5	64.1	16.3	1.1
2016	18.5	64.6	16.9	—

表9 ③保育所 (％)

	①	②	③	④
2013	38.6	56.4	10.9	—
2014	16.7	77.4	8.3	—
2015	27.2	62.0	10.8	—
2016	20.0	72.3	7.7	—

2013年度は、「①：親しみが湧いた」が小学校・幼稚園・保育所ともに30%を超えているが、後の3年間をみると、「②：参観したい気持ちが強まった」が増えているのがわかる。特に小学校、幼稚園、保育所と参観を重ねる度に参観したいという気持ちが強まっているのは、単に小学校教師を希望している学生が少ないというだけではない。これは質問項目1とも関連するのだが、参観の順番によるところも大きいと考えられる。初めて学外体験として参観する小学校では、事前レポート

の内容も情報を列記することで満足し、「参観の視点を持つ＝ねらいを持って参観に臨む」と言われても、それが何を意味するのかまだわからない状態の学生が多かった。しかし小学校参観を経験し、振り返りのディスカッション、合同のディスカッションを経て、事前に参観する場所の情報を知ることの必要性・効果や視点をもって参観に臨むことがどういうことなのか徐々にわかってくる。それにより、その後の幼稚園、保育所参観の事前レポートの内容も変わっていったのだと思われる。従って「③：特に変化がなかった」「④：あまり関心が持てなかった」の項目の割合が小学校、幼稚園、保育所と参観を重ねるにつれて減少していくのは、事前レポートの内容に自分なりの情報の収集や参観の視点を見つけることで、興味、関心をもって参観に臨む姿勢が身についてきている現れではないかと考えられる。

【質問3】

2012年度から加えた質問項目3は「ゼミ合同のディスカッショングループは固定でしたが、いかがでしたか？」であり、回答項目は、

- ①：固定でよい。
- ②：毎回変えたほうがよい。
- ③：どちらでもよい。

である。回答者の割合（％）は表10に示したとおりである。ちなみに、2012年度は、①30%、②37%、③どちらでもよい32%と、ほぼ拮抗した回答となった。

表10 ゼミ合同ディスカッショングループ (％)

	①	②	③
2013	56.4	19.8	21.8
2014	63.1	13.1	22.6
2015	76.1	5.4	18.5
2016	44.6	20.0	35.4

2015年度は極端に「②：毎回変えた方がよい」が少なく、「①：固定でよい」の割合が多くなっている。「話しやすいメンバーだったので変えなくてよい」という学生のコメントも書かれていたが、合同ディスカッションのメンバーは気の合うメンバーや意見が飛び交うメンバーが集まると固

定でもよいと言う意見が多くなり、ディスカッションが停滞したり会話に入らない学生がいるグループでは、話が深まらずメンバーの移動を望む声も高くなる傾向は変わらないようである。ただ、2012年度に比べて、それ以降「①：固定でよい」の割合が「②：毎回変えた方がよい」より高くなっているのは、授業担当者がディスカッションの進行状況を確認しながらアドバイスを与えることにもよるが、参観を重ねるごとに自分の参観場所での気づきやエピソードを上手く伝えることや、相手の話を聞いて意見を言う流れが徐々にできていたからではないだろうか。そう考えると「地域社会と子ども」の授業では、まずゼミ内でのメンバーと固定の合同メンバーでのディスカッションを実施するが、これを3回繰り返し行うことで、1年生のコミュニケーション能力を養う効果があると言えるのではないだろうか。

#### 【質問4】

体験型授業が学生に与えた影響については、「参観を体験して、今一番関心がある子どもの年齢は、次のどれですか」の数値が参考になる。

選択肢は、

- ①：小学生
- ②：3～5歳
- ③：2～0歳
- ④あまり興味がない。

⑤どの年齢にも興味があり、一つに絞れない。  
(複数回答可)である。回答者の割合(%)は表11に示したとおりである。

表11 参観体験後、一番関心のある年齢(%)

	①	②	③	④	⑤
2013	23.8	55.4	33.7	—	20.8
2014	28.6	56.0	38.1	—	15.5
2015	25.0	73.9	44.6	1.1	14.1
2016	27.7	53.8	38.5	—	23.1

2013年度以降も「②：3～5歳」への関心が高いことがわかる。幼稚園、保育所で元気に遊ぶ幼児は、学生にとって印象に残る姿のようである。乳児の場合は、参観で部屋に入れる人数が限られており、かかわることができない場合が多い。ま

た「⑤どの年齢にも興味があり、一つに絞れない」学生の割合が20%前後で推移しているのも、資格取得希望の年齢で絞るのではなく、成長の連続として子どもを捉えることにつながるという意味で、今後の学びに期待したい。

#### 【質問5】

アンケート項目5「ゼミグループ以外の体験内容について話を聞くとしたら次のどの内容を聞きたいと思いますか？(もっと話し合いの時間がほしいかったのはどれですか?)」の回答は、

- ①：小学校
- ②：幼稚園
- ③：保育所
- ④：認定こども園(2016年度よりの選択肢)
- ⑤：特にない。

(複数回答可)である。回答者の割合(%)を表12に示した。

表12 もっと聞きたい体験(%)

	①	②	③	④	⑤
2013	23.8	26.7	45.5	—	10.9
2014	27.4	33.3	45.2	—	7.1
2015	20.7	31.5	48.9	—	9.8
2016	16.9	15.4	21.5	55.4	6.2

2016年度のアンケートで回答の項目を一つ追加したのが「④：認定こども園」である。この項目追加により、複数回答可であるにもかかわらず、回答の割合が前年までに比べて変化した。それだけ認定こども園というものが、また学生の間には理解されていない名称なのであろう。たしかに彼らが幼少期にはなかった名称であるから、その情報をもっと知りたい・聞きたいと思うのは当然のことである。参観先の幼稚園、保育所にも認定こども園を入れてはあるが、一回の参観で把握できるものではない。今後は、本科目で実施するとすれば、「幼児期の子ども理解」「乳児期の子ども理解」の講義の中で、時間を取って説明する必要があるようだ。

#### 【質問6】

質問項目6は「講義と体験によりこれまで持つ

ていたイメージや（子ども・施設）理解に変化がありましたか？」という、体験型の本授業が学生に影響を与えたのかどうかを問うものである。回答の選択肢は、

- ①：変化があった。
- ②：変化がなかった。
- ③：不明

である。回答者の割合（％）を表13に示した。なお、無回答があるため、100％にはならない。

**表13 講義や体験でのイメージや理解の変化（％）**

	①	②	③
2013	87.1	6.9	5.9
2014	91.7	6.0	—
2015	97.8	1.1	1.1
2016	95.3	4.7	—

2011年度のアンケート開始以来、ほとんどの学生は、参観を通して「①：変化があった」と答えている。そして2015年度2016年度に限定したことではあるが、「②：変化がなかった」と答えた学生は、その後も教育・保育に関心をもつことなく、別の道を歩んでいる。つまり「地域社会と子ども」の体験型授業は、自分がどれだけ教育・保育に関心があるかを見極めることができるという点において、重要な役割を果たしている科目であるとも言える。

#### 【質問7】

質問項目7は、質問項目6で「変化があった」と回答した人に対し、「どのような点で変化があったのか」を尋ねたものである。選択肢は複数回答可であり、

- ①：小学校教諭の資格に興味を湧いた。
- ②：今まで以上に小学校教諭の資格に興味を湧いた。
- ③：幼稚園教諭の資格に興味を湧いた。
- ④：今まで以上に幼稚園教諭になりたい気持ちが強くなった。
- ⑤：保育士資格に興味を湧いた
- ⑥：今まで以上に保育士になりたい気持ちが強くなった。
- ⑦：小学校・幼稚園・保育所以外での仕事に関

心を持った。

⑧：どの職種にするか迷ってきた。  
となっている。回答者の割合（％）を表14に示した。

**表14 変化の内容別（％）**

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
①	24.8	16.7	15.2	26.2
②	16.8	23.8	19.6	20.0
③	36.6	31.0	34.8	26.2
④	42.6	32.1	38.0	44.6
⑤	35.6	33.3	35.9	29.2
⑥	41.6	31.0	46.7	58.5
⑦	10.9	10.7	4.3	9.2
⑧	25.7	32.1	32.6	29.2

複数回答であるため一概には言えないが、近年「④：今まで以上に幼稚園教諭になりたい気持ちが強くなった」より「⑥：今まで以上に保育士になりたい気持ちが強くなった」の割合が多くなり、2016年度はついに60％に届く勢いである。参観やディスカッションを通して保育士への関心が高まったことも要因だと思うが、保育所（こども園）という施設の環境が幼稚園に比べて格段に違うことも挙げられるのではないだろうか。参観記録を見ると、乳児のクラスの衛生的配慮や豊富な遊具について記述している学生も多い。初めての参観では、施設の規模を含め物的な環境に目を奪われてしまうのも仕方のないことだが、子どもの健やかな成長にとって何が大切なのかをこれから学んでいく中で、改めて幼稚園、保育所の機能と役割を見てほしいと願うものである。

#### 【質問8】

質問項目8は「学外体験により、子どもに対する見方などに変化がありましたか？」である。回答項目は複数回答可であり、

- ①：関心ある対象が広がった。
- ②：いっそう子どもに関する仕事に興味を湧いた。
- ③：他の授業への興味を湧いた。
- ④：子どもに関する仕事への迷いが生じた。
- ⑤：自分に適性があるか不安が生じた。
- ⑥：もっといろいろな施設での体験をしたくな



った。

⑦：早く実習に行きたいと思った。

⑧：どの職種にするか迷ってきた。

⑨：実習への不安が出てきた。

⑩：特にない。

である。回答者の割合（％）を表15に示した。

表15 子どもの見方への変化の内容別（％）

	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
①	40.6	46.4	45.7	47.7
②	65.3	57.1	58.7	67.7
③	13.9	13.1	12.0	24.6
④	13.9	15.5	7.6	13.8
⑤	36.6	47.6	43.5	44.6
⑥	37.6	45.2	32.6	47.7
⑦	16.8	23.8	21.7	16.9
⑧	19.8	15.5	13.0	13.8
⑨	32.7	48.8	53.3	46.2
⑩	—	—	—	3.1

「②：いっそう子どもに関する仕事に興味を湧いた」の項目は、2012年度の80.3%<sup>12</sup>には及ばないものの、60%前後で推移していることから、教育・保育を目指す学生の意識が具体的に芽生えていることが伺われる。「⑥：もっといろいろな施設での体験をしたくなった」も40%前後と多く、視野を広げていこうと意欲的になっている学生がいる。その一方で、半数近くの学生が「⑤：自分に適性があるか不安が生じた」「⑨：実習への不安が出てきた」と消極的な回答をしているのも事実である。現場の実際を見たことで、より現実的に考え不安をもつ学生も多いことがわかる。しかし、資格の特性から、早い段階から「適性」を意識していくことは必須であり、これを抜きにして考えられるものではないため、キャリア教育との連動を課題として検討していく必要がある。また「⑦：早く実習に行きたいと思った」の回答が20%前後と、不安を抱く学生の回答（30～50%）の半分以下である結果をしっかりと受け止め、実習指導のあり方については、今後の検討課題としたい。

#### 【質問9】

質問項目9は「2年次からのコース選択の参考

になりますか？」である。選択肢は、

①：参考になった

②：どちらかといえば参考になった

③：あまり参考にならない

④：参考にならない

である。回答者の割合（％）を表16に示した。

表16 今後のコース選択の参考になったか（％）

	①	②	③	④
2013	65.3	29.7	3.0	—
2014	66.7	31.0	1.2	—
2015	73.9	26.1	—	—
2016	87.7	10.8	—	1.5

表1で示したように、入学時にコース希望調査を行うが、この「地域社会と子ども」の授業を始め前期の授業終了後にコース変更を模索する学生も少なからずいる。2016年度から新設された小学校教諭コースを履修するには、1年前期のGPAが2.5以上という条件が設けられたことにより、数名の学生が児童教育コースへの変更<sup>13</sup>となった。こうして本格的な教育実習、保育実習が始まる2年次までに、自分のコースをしっかりと決める手段として、表16からもわかるように「地域社会と子ども」の授業は大いに参考になっている。

### 3. 総括

#### 1) 全体総括

「地域社会と子ども」の授業は、1年次の学科入門科目ということもあり、授業の概要、授業の到達目標、授業計画、成績評価方法と基準など、シラバスを見ながら学生とともに把握するところから始めるのも一つの特徴である。つまり学生は「授業の到達目標」を意識しながら、この授業が求めているねらいを念頭に置き、授業に臨んでいるのである。「はじめに」でも述べたように、本科目は教育、保育のスペシャリストとしての学びを重ねていくための必修の学科入門科目である。15コマの授業終了後、その成果を知ることは、今後の免許、資格を取得する上で重要な鍵となるため、「授業の到達目標の達成度」の項目を2014年度のアンケート加えることとなった。その結果、参観を重ねるほど、またディスカッションは回数



を重ねるほど、事前レポートの内容が深くなり、それが自分なりの視点をもった参観態度につながっていることがわかった。そうすると子ども同士のかかわりや教師、保育者とのかかわりも徐々に見えてくるようになり、気づきが多ければ多いほど、ディスカッションでの発言も増え、意見交換も活発になる。実際、コミュニケーション能力が高まったと回答している学生も増えている。また合同ディスカッションのメンバーも「固定でも交代でもどちらでもよい」と答えた学生が2016年度は35%強いということは、逆に考えると、固定メンバーにも毎回変更された新規メンバーのどちらでも対応できるということであり、学生の学びの特徴と見ることができる。

また、記録の記述に関しては、「授業の到達目標」の項目の中では一番低い数値であったが、2016年度に4点台に上昇した。「3）授業の内容についてのアンケート結果と考察」において既に述べてきたことの繰り返しになるが、「Enjoy! ミッション」での4年生との協働による効果の現れでもあると考えられる。1年生は記録を残すだけではなく、一緒に遊びを計画し、その遊びのプランや記録を4年生が添削を行う。添削後の記録を1年生は修正加筆し、再び添削という体験を経たことにより、記録の書き方をある程度学ぶことができたことによる成果である。異学年の協働は、双方の学年に互いよい影響を及ぼし、両者の学びにつながっている。

このように本学独自の科目である「地域社会と子ども」は、「授業の到達目標の達成度」を始め各項目のアンケート結果を見る限り、学生が将来の進路を決める上で、一定の成果を挙げていると言える。

## 2）課題

2017年度入学生から、中学校教諭免許（英語）も取得可能となった。それに伴い、2017年度の「地域社会と子ども」に中学校参観を組み込むために授業計画の見直しが行われた。具体的には、「Enjoy! ミッション」参加学年を1年生から2年生に交代し、2年生が4年生と組むことになった。これは2016年度開始の新カリキュラムの施行により、幼稚園教育実習Ⅰ（5日間）<sup>14</sup>が2年次の9月

に行われることになったためである。そのため「Enjoy! ミッション」は今後、実習指導の一環として行うことになった。「Enjoy! ミッション」への参加がなくなったことで空いたコマに中学校参観を新たに入れることとした。しかし元々中学校免許希望の学生が多いわけではない<sup>15</sup>ため、1年生全員が中学校参観するのではなく、希望者のみ同じ法人の学校である北陸学院中学校の参観を行うことになった。免許科目が英語という科目に限定されているとはいえ、果たして希望者だけでよかったのかという問題<sup>16</sup>が残り、次年度実施に向けての検討課題となった。

また1年生は、幼稚園における夏の預かり保育体験（5日間）を、従来は可能な限り2年生とペアで実施してきた。その点においてもカリキュラムの変更の影響で、従来3年次に行っていた保育実習（施設）を2年次8月に履修することに変更された。これらの変更により、1年生と2年生が同時期に夏の預かり保育体験を行うことができなくなり、1年生にとっては4年生をはじめ2年生とも協働する機会を失う結果になった。

そこで今後は、1年生が新たな「地域社会と子ども」の授業計画の中でも、2年次の実習に向けて、しっかり自分の専門コースを捉え、学ぶことができるよう、担当教員が力を合わせて取り組む必要がある。

## 4. おわりに（提言に替えて）

文科省が示している大学におけるキャリア教育の観点から、「地域社会と子ども」の位置付けを再確認してみたい。資格に直結している点では、本学科では卒業時までの学びはイメージしやすいように思われる。しかし、かつて短大の保育学科時代に、「ピアノが弾けるから、それを活かして幼稚園や保育園の先生になったら」と親や教師に勧められて入学してきた学生が何名もいた。2年間という短い期間では、資格取得のための科目の学びと実習に追われて適性や進路に迷う時間的余裕がないまま、卒業して現場に入ってしまった。そのうちの一部の学生は保育者としての適性が明確でないまま、楽しそうに見える保育者像だけをモデルとして学ぶことになり、入学後の授業や実習現場に出て挫折した学生や、勤務後に「こんなは

ずではなかった」と言って早期離職した卒業生のケースもあった。

一方、4年間という倍の期間をかけて履修ができる学生は、自らの進路や適性を考える時間的ゆとりがあることに加え、文部科学省の提唱による、キャリア教育の実施の効果も期待できる。

近年、少子化が進む中で女性の就労割合は増加しており、本学の所在地である石川県をはじめとする近隣の県では、特に女性就業率が高い<sup>17</sup>。保育を必要とする子のための保育所・認定こども園の割合も増加傾向にあるが、幼稚園においても子育て支援として満3歳児保育、預かり保育、2歳児受け入れなど、さまざまな動きが加速している。加えて、発達障がい児の保育・教育や児童虐待への対応、子育てをする保護者への指導・助言など、保育者・教育者の置かれる環境は厳しいものがある。それに対応して、例えば保育士確保対策やそのための処遇改善に関する関係省庁の通知<sup>18</sup>が出されたことに加え、2017年10月に告示される解散・総選挙では、「幼児教育の無償化」をはじめ、子育てに関する公約が盛り込まれるなど、世の中の動きも変化している。また、教員採用の実施主体となる石川県では、団塊の世代の大量退職による教員の質の低下を防ぎ、指導力を持つ教員育成のために、教職志望学生を対象とした「いしかわ師範塾」を開講するなど、受け入れ現場での取り組みも行われている。

このような雇用情勢・教育保育の現状の変化に対応できる人材の育成には、大学入学の間もない1年次の段階から現場を知り、適性を見極めること、必要な知識・技術のみならず、対人援助職として求められる資質、コミュニケーション能力など、多岐にわたる。これらの要素については、シラバスに組み込み、保育・教育現場に参観する前の講義において最新の情報と見るべきポイントなどを学生に伝え、体験をグループディスカッションを通して、他者と学びを共有していくことが欠かせない。さらに、シラバスに明記した「授業の到達目標」を学生が自覚しながら授業に臨むためには、本科目で行っているような随時シラバスを確認する形がよいのかどうかについても、学科での協議、検討していく必要があると考えられる。

本稿においては、2014年度から実施した授業到達度目標の自己評価を集計し考察を行った。その結果、一項目を除きほぼ4点台（5点満点）という、ある一定の成果が示されたと言えよう。このうち、3.5程度に留まった「地域の実情と課題を発見し、対応方法を考えることができる」については、確かに入学半年に過ぎず、ほとんど専門科目を学んでいない1年生には無理な項目であると言えなくもない。しかし、すべてが達成可能な容易な目標ではなく、4年間の学びを通してその目標を達成していくことが、真の人材育成につながると同時に、大学4年間における学科カリキュラムの深化であると考えられる。今回の到達目標で示された数字を一人歩きさせるのではなく、達成できていないと学生が自覚していることを評価し、目標達成には4年間の学びの中で何が必要かを教員・学生が共に考えて行くことが重要となる。

そのためには、科目間連携による学びの連環の構築<sup>19</sup>とその意識の醸成を、科目担当教員が持つ必要がある。また、既に保育現場などで導入されているPDCAサイクルの視点を組み込むことも、学生の学びの効果につながると考えられる。さらに、アセスメントのあり方を検討する際に、卒業を前にした時点での到達目標の評価に、1年次の評価項目を含めて変化から検証することも可能である。本科目の到達目標が、一つの指標となるであろうが、実施に向けての検討を開始したい。

最後に、「地域社会と子ども」の授業担当者は筆者2名の外に2013年度から2016年度にかけて、大井佳子・岡本弘子・金丸洋子・金森俊朗・熊田凡子・齊籐英俊・東海林渉・辻直人・幸聖二郎・宮浦国江が担当した。アンケートの集計と考察は筆者が行っているが、学生への助言を含め成果は全教員によるものであり、不備に関しては筆者に帰するものであることを付言する。

#### 〈付記〉

謝辞：本授業を行うに際し、これまでに参観先として下記の施設にご理解・ご協力をいただきました。ここに記して感謝申しあげます。（五十音順に記載）

小学校：泉野小学校、扇台小学校、小立野小学校、  
十一屋小学校、新堅町小学校、中央小学校、  
長坂台小学校、南小立野小学校

幼稚園：愛香南部幼稚園、川上幼稚園、  
金沢めぐみ幼稚園、桜木幼稚園、白銀幼稚園、  
北陸学院扇が丘幼稚園、北陸学院第一幼稚園、  
若草幼稚園

保育所：泉の台幼稚舎、小立野善隣館愛児園、  
のぞみ保育園、野町保育園、梅光保育園、  
平和保育園、わかばこども園、  
未来の広場（旧名称：若松保育園）

〈注〉

<sup>1</sup> 2017年度より子ども教育学科に改称

<sup>2</sup> 「児童教育」「幼児保育」「人間理解」コースから「小学校教諭」「児童教育」「保育教諭」コースに変更

<sup>3</sup> さらに「小学校・中学校教育」「幼児・児童教育」「幼児教育・保育」コースに変更

<sup>4</sup> 2016年度の授業シラバス

	内 容
1	オリエンテーション
2	プレ実習のすすめ
3	4年と合同で Enjoy! ミッションの話し合い
4	児童期の子ども理解
5	学外体験① Enjoy! ミッション遊びの広場
6	学外体験② 小学校参観
7	ディスカッション：小学校参観の振り返り
8	幼児期の子ども理解
9	学外体験③ 幼稚園参観
10	ディスカッション：幼稚園参観の振り返り
11	乳児期の子ども理解
12	学外体験④ 保育所参観
13	ディスカッション：保育所参観の振り返り
14	グループディスカッション：まとめレポート
15	全体レポート発表：最後のレポート作成

<sup>5</sup> 山森は2013年度、2014年度、向出は2015年度、2016年度、2017年度の科目代表者として、シラバス作成及び外部との交渉、合同授業の際の中心的進行を努め、授業における最終アンケートの作成と集計を行った。

<sup>6</sup> 2011年度、2012年度の紀要参照。  
詳細は、後で追記する。

<sup>7</sup> 「Enjoy! ミッション」とは、幼稚園・小学校・高等学校・短期大学部・大学をもつ総合学園としての北陸学院において、多くの園児・児童・生徒・学生が同じ建学の精神の基に学んでいることと、上の学校への進学を意識してもらうために、5月を中心に大学構内に一堂に会して行われる行事である。

<sup>8</sup> アセスメントについては、各大学で経年の検討課題となっていることが多い。筆者（山森）が委員として関わっていた大学間連携共同教育推進事業のなかでも、この点に関しての視察を、複数大学を対象に実施した。しかし、授業効果を検証することの難しさはどの視察先においても課題となっており、検討中であるとの回答に留まったことから、この点を評価することの難しさが表れている。

<sup>9</sup> 限られた期間中に、70～80名の学生が実習を行うためには、キリスト教主義幼稚園を石川県に加え、近隣の富山県、福井県にも拡大して依頼しているが、幼稚園全体の数からみてキリスト教主義幼稚園は数が少なく、受け入れ園のキャパシティに限界があるため、やむを得ない措置としての変更である。

<sup>10</sup> GPA2.5という数値は、単純な順位付けでみると上位1／2に相当する。年によって多少変動するが、概ねこの傾向は変わらない。

<sup>11</sup> 具体的には、注4のシラバスをご覧いただきたいが、学外活動の最初が「Enjoy! ミッション」であり、ここでの参観記録をきちんと作成することが、以後の参観記録作成に影響を与えていると、筆者らは考えている。

<sup>12</sup> 注6参照

<sup>13</sup> この変更については、入学時のオリエンテーションで説明をしているほか、ゼミ教員を中心として個人面談などの機会を設けて、指導・相談・助言を行っている。

<sup>14</sup> この実習時期をいつに設定するかでは、これまでも種々検討を重ねてきている。早い段階で現場を知るといふねらいで、それまで2年次9月に実施していた「幼稚園教育実習Ⅰ」を1年次の1月に変更した。（2011年度から）今回の変更は、その逆のパターンとなる。

<sup>15</sup> カリキュラム初年度ということもあると思われるが、2017年度1年生の入学時における進路希望調査では、10名（12.8%）となっている。今後の希望人数は未知数である。

<sup>16</sup> この参観で何を学ばせたいか（参観のねらい）をどう設定するかにより、参観する学生の枠組みが変わってくる。例えば、中学生という「生徒」の様子を知りたいのか、教科専門性である中学校の教員免許について知りたいのか、英語の教え方について知りたいのか、など。

<sup>17</sup> 総務省「平成24年就業構造基本調査」によると、22～44歳の育児をしている女性の有業率は、福井県（3位）富山県（5位）について石川県（6位・68.2%）であ

る。現在平成29年10月1日現在で最新の就業構造基本調査を実施中である。

<sup>18</sup> 例えば、構成労働者が平成27年に出した「保育士確保プラン」では、保育士試験の年2回実施や処遇改善などについての取り組みの方向を示している。

<sup>19</sup> ナンパリングの表示だけでは達成は不十分であると考えられる。